

融入影像教材與學習策略於任務型 日語課程之設計

林盈萱* 難波康治**

摘 要

本論文旨在探討融入影像教材與學習策略於任務型日語課程是否能提升非日文系專攻大學生之日語學習成效。本課程時間經過十四週的期程，透過對 47 位非日文系專攻學生所實施的課程滿意度問卷調查、會話前後測及學習策略調整調查進行分析，獲得以下成果。

首先，經由滿意度問卷調查發現，參加此課程學生表示本課程所自製的影片教材、與其他同學合作學習以及多樣的日語學習資源的提供有助於維持本身的日語學習動機。另外透過學期初以及學期末各一次的日語會話測試，發現參加學生在學期末的日語口頭表現在語彙量以及句子複雜度都較學期初有所進步。而透過學習策略調整調查，發現學生普遍表示學會使用本課程中所提供的學習策略，顯示自律學習能力的養成有了初步的成效。

關鍵詞：自製日語影像教材、任務設計、學習策略、非日語系大學生

* 逢甲大學外語教學中心專任助理教授。

** 大阪大學國際教育交流中心副教授。



I. はじめに

これまで海外で学ぶ日本語学習者は、日本語に触れる環境に恵まれず、日本語によるインプットの量が圧倒的に少ないだけでなく、教室で学んだ言葉をすぐに現実生活に使うことができないという制限も受けていた。しかし、テクノロジーの革新によって、海外という学習環境の中でも、学習者が自律的に自分が必要としている学習リソースを獲得することが可能となった。また、情報技術の進歩とともに、学習は教室の中でテキストにもとづいて行われるものと限られなくなり、学習者の学び方も指導者の教育のあり方もともに従来にない可能性が広がってきた。実際、Youtube などの動画共有サイトを見るまでもなく、ネット上には様々な日本語、あるいは日本に関するリソースが存在し、それらをうまく活用して、驚くほどの日本語能力を獲得する学習者も存在する。しかし、その学習リソースを有効利用するための能力を身につけさせる支援とは何かを検討すること、また、学習者が学んだことを即座に運用できる現実生活に起こりうるような状況を、いかにテクノロジーを生かして提供できるかを考えることが指導者にとって課題となってきた。

本実践は筆者らが 105 学年度に台湾逢甲大学の外国語教育センターで開講した「インターネット日本語」という授業において、台湾で日本語を学ぶ非日本語専攻の大学生のために、どのようにインターネットリソースを利用し、日本語学習支援ができるかについて模索したものである。その中で、自作の映像教材をもちい、タスク中心の外国語教育に基づいて実践を行なった。また、その際、学習者に学習ストラテジーの指導を行った。これらを合わせた教育デザインのあり方について、あらかじめ検討を加えた。以下、それらに関する先行研究を述べた上で、本研究の課題につなげていく。

II. 先行研究

1. 映像を取り入れた日本語教育

外国語を学ぶ際、単に文字や挿絵から構成された紙の教材より映画やアニメなどの映像を通して学ぶことは、目標言語が使われている状況や視覚的、聴覚的な情報を獲得しやすいという利点があげられる。そこで、近年、映像教材を取り入れた日本語教育への提案と実践が多く行われてきた。それらで取り扱わ



れる映像教材には、アニメや映画、教育用ドラマ教材などがあげられる。

まず、アニメを取り入れた教育法について議論しているものには、牧野 (2008)、矢崎 (2009) があげられる。牧野 (2008) ではアニメ「千と千尋の神隠し」を主な教材に、日本語、日本文化の教育方法について提案している。矢崎 (2009) ではアニメを日本語授業に活用するための教材として「アニメで日本語」を開発し、それにもとづいた実践を報告し、その中でアニメの視聴による仲間同士の体験をもとに、登場人物の絵と名前の組み合わせから、様々な日本語の総合的な運用能力を促進する活動を取り上げている。

実際にアニメを利用した日本語教育実践として、柴田 (2008)、呉承和 (2012)、黄女玲 (2016) があげられる。

柴田 (2008) はプリンストン大学で中級レベルの日本語コースでアニメを使い、学習者の日本語の総合的能力を伸ばす試みを行った。授業の中に使ったアニメの内容の話し合いに加え、文法、語彙の練習を行ったうえで、宿題として要約と発音練習を課した。その結果、アニメ教材の内容の面白さが高く評価され、言語能力の伸びについては、読解能力が伸びたと自覚した学生が多いという結果を報告している。

呉承和 (2012) では、台湾で学ぶ初級の非日本語専攻大学を対象にして、アニメ「あたしんち」を使い、実践を行った。学習者へのアンケート調査結果から、アニメ教材の使用によって、学習者の「映像を通して、様々な文型、表現実際にどう使われているのかがわかる」というフィードバックから映像教材の使用に高く評価されていることがわかった。一方、映像教材のスピードが早いいため、聴解は難しかったという意見もあった。

黄女玲 (2016) は、台湾で学ぶ応用日本語学科の大学生が敬語の使用に対する「気づき」を促すという教育目標を立て、『彩雲国物語』というアニメを通して敬語の学習に焦点を与えた教育デザインを行った。学習者へのアンケート調査を実施した結果、アニメ教材の使用に対して「聴解のいい勉強になる」、「楽しく面白かった」というポジティブな意見が得られた反面、使ったアニメの内容が難しいという声もあげられた。

映画作品を利用した教育実践に関し、宮副・吉村 (2005) では、日本と香港の大学生を対象に、映画『Love Letter』または『ウォーターボーイズ』を授業に取り入れ、日本社会・文化に関わる意見について、電子メールで交換する学習支援を行なっている。尹 (2008) では、韓国で日本語教育専攻の4年生を対象に「映像日本語演習」において、数多くの映画作品を使用し実践を行った。このように、海外では映画を利用した日本語教育実践が行われており、上



記以外にも様々な実践があると考えられる。しかし、その実践の具体的な進め方については十分に共有されていないのが現状である。

アニメや映画を使った外国語教育は、学習者に紙の教材より多くの情報を提供ができ、学習動機の促進にいい影響を与えることがわかった。ところが、使用した映像は、それがもし教育目的で作成されたものでなければ、教育現場における学習リソースとしては難度が高いという問題点も示唆されている。

一方、インターネット上で映像教材を配信するサービスが提供され始め、日本語話者が不足する海外でもオンライン教材を通して簡単に生の日本語音声や映像にアクセスできるようになった。日本語教育のオンライン動画教材として実際に提供されているものとしては、国際交流基金の『ヤンさんと日本の人々』、『Web 版エリンが挑戦！日本語できます』や『まるごと日本語』がよく知られている。これらの映像教材は、現実遭遇する様々なシチュエーションを教材化して提供しているため、海外の日本語学習者にとって非常に有効な学習リソースとなっている。しかし、学習者のニーズや動機の多様化とともに、地域ごとの事情も異なり、学習者の共感への配慮を考えた場合、現在提供されているリソースだけでは十分とはいえない。この点について、金田（2014）は、各地の教師が地域個別の事情や学習者の特性に対応するような教材を自ら作成し、補完する必要性があると提言している。

以上、映像を利用した日本語教育の先行研究を概観してきたが、実際に海外の教室において、どのように映像を利用し、学習者の外国語の習得の支援につなげるのかについて今一度考えなければならない。つまり、単に映像を使うだけでは習得は始まらず、いかに学習者の動機を喚起し、また、具体的にどのような学習方法を駆使し、どのように自発的に自分の学習を管理していくのかが、特に海外で学ぶ場合の学習者にとって重要である。それには、指導者からの支援が必要である。次は学習ストラテジー指導と自律的能力の養成の関係についてまとめ、本研究のカリキュラムデザインの理論的依拠を示す。

2. 学習ストラテジーの指導と自律的能力の養成

教師主導型の教育から学習者中心への言語教育観が次第に重視されるようになり、自律的学習の概念が教育現場に取り入れられてすでに久しい。学びの過程において、自ら客観的にモニターし、周りの環境にある学習リソースを生かし、適切な学習ストラテジーを使用できる学習者は、そうではない学習者より効果的な学習成果が得られると指摘されてきた（Zimmerman, B.J., Bonner, S., & Kovach, R., 1996）。しかし、一部の学習者は自律的に学習を進めていくことが



できるものの、ほとんどの場合は教師を含めた他者からの支援が必要であることも同時に指摘されている。したがって、優秀な学習者が効果的に使っている学習ストラテジーを明らかにし、それらを外国語の授業に取り入れると、学習者の言語習得を助けることができると考えられ始め、学習ストラテジー指導に関する研究が盛んに行われてきた。これまで、日本語教育の領域において、自律的学習能力の促進という観点により、学習ストラテジー教授活動のデザインや実証研究が試みられてきた（関 1997；板井 2003；溝口 1995；村上 2008 など）。台湾人日本語学習者を対象にした学習ストラテジー指導の研究はまだ十分と言えないが、ここではいくつかをあげる。

林明煌（2005）は、台湾人高校生を対象に Oxford（1990）で紹介された学習ストラテジーを初級の日本語の授業に導入した。そして、学習ストラテジーを取り入れた学習支援を実施した後、Oxford（1990）の SILL (Strategy Inventory for Language Learning) を用い、学習ストラテジーの変化について調べた。調査の結果、学力が高くない生徒のほうが学力が高い生徒より学習ストラテジー指導の効果が高いということが明らかになった。

呉如惠（2012）では、聴解の部分に注目し、台湾人の優れた日本語学習者が使っている聴解ストラテジーを明らかにし、「メタ認知」、「認知、基礎」、「視聴、生教材利用」、「推測」、「持続」、「協働」というストラテジーを授業に取り入れた。その結果、トレーニングの前後における学習者のストラテジーの使用頻度に有意な変化が見られたと報告している。

また、林盈萱（2009）では、台湾で学ぶ日本へ留学する予定のある学習者を対象に、日本にすでに留学している台湾人大学院生が使ってきた学習ストラテジーを日本留学準備クラスに取り入れた。この研究では「記憶」、「認知」、「メタ認知」、「補償」、「社会的」、「情意」、「環境づくり」、「勉強」ストラテジーを授業に取り入れ、18 週間の日本語会話授業を行った。その結果、受講生が日本へ留学した後でも自律的に日本語学習する様子が観察された。

さらに、学習ストラテジーの指導をタスクベース型外国語教育と併用して取り入れた実践には林盈萱（2015）がある。この実践は、初中級の段階にある非日本語専攻大学生を対象に、日本語による書く能力の向上を授業の目標とし、その目標の達成につなげるタスクをデザインした。また、タスクの遂行を助けるために「単語、文型を習った後文を作る」、「マインドマップを使って、文章の構造を考える」、「テキストの文章を真似して書く練習をする」などといった学習ストラテジーを指導した。18 週間の実践後の調査では、学習者の 9 割以上が授業に取り上げられたタスクと学習ストラテジーが自分の学びに役に立



っていると答えており、授業満足度も高かった。

本稿における実践の対象は台湾で学ぶ日本語非主専攻の大学生であり、彼らは教室で日本語を学ぶ時間が限られている。そのため、彼らが教室を出た後、または学校での教育を受けなくなっても、自律的に学習できるように、学習動機の促進と自律的学習能力の養成に役に立つ工夫が必要である。そこで、教師による自作映像の使用、現実の生活で起こりうるタスクの提示、または日本語学習ストラテジーを取り入れた学習支援を構想した。次項では本実践における調査の概要について述べる。

III. 実施概要

1. 調査対象とニーズ調査

本研究の調査対象は、105 学年度前期逢甲大学で開講された「網路日文（インターネット日本語）」を受講した 47 名の日本語非主専攻の学部生である。逢甲大学において、過去に開講された「インターネット日本語」の授業目標は主に「インターネットの日本語リソースを紹介すること」と「日本語で入力する技能を身に付けること」とされていた。今回はインターネットを通じて日本語や日本文化を学ぶことと同時に、日常生活での運用も視野に入れ、より学習者中心に授業を構成することで、これまでのやり方とは異なる授業内容へと更新することを目指した。

学習者のレディネスを把握するために、授業開講日に調査対象者に「過去の日本語学習歴」と「日本語を学ぶのに使うリソース」と「日本語を日常生活に運用した経験」、「日本語学習に関する悩み」というテーマで調査票を配布し、自由回答という形で意見を聞いた。

まず、「過去の日本語学習歴」については、9 割以上の受講生が過去少なくとも逢甲大学で開講された 1 年間の基礎日本語を学んでいることがわかった。また、基礎日本語の授業で使用された教材として、『みんなの日本語初級 I』¹が多く挙げられていた。次に「日本語を学ぶのに使うリソース」について、学校で使われている教材以外に、「日本ドラマ、アニメ、映像」を通じて学ぶという意見が最も多かった。さらに、「日本語を日常生活に運用する経験」について、半分以上の受講生が「まったくなかった」と答えた。そのほかに、「台湾

¹ ここであげている教材は中国語版の「大家的日本語初級 I」を指している。



に来ている日本人留学生と会話したことがある」ことと「日本語で日記を書く」ことなどの積極的に学んだ日本語を活用しようとする人がわずか3人いた。また、「日本語学習に関する悩み」については、「日本語能力試験を準備する方法がわからない」という意見が出たほか、「単語が覚えられない」、「文法知識が足りなくて、自分でうまく文章を作れない」などの悩みが挙げられていた。

学習者へのレディネス調査から、学習者の大半が教科書以外に日本ドラマやアニメ、映画などのリソースを用いていることが明らかになったため、映像という形で学習内容を提示することが彼らの学習動機の向上に役に立つと考えた。また、日本語のレベルに関しては、『みんなの日本語初級Ⅰ』を終えた段階で、『みんなの日本語初級Ⅱ』に該当する単語や文法項目の学習も引き続き必要であることも判明した。日本語を日常生活に積極的に運用する学生が少なかったため、授業内容のデザインは、できる限り彼らが囲まれている現実世界ですぐに使えるような場面の提示を念頭に入れ、学習活動をデザインする際に、現実起こりうるタスクを取り上げることとした。さらに、彼らが将来自律した学習者になれるよう、学校を卒業した後でも、一人で運用できるインターネットリソースを利用した学習ストラテジーの指導を考案することにした。

2. 研究課題とデータ収集

学習者に対するレディネス調査に基づき、本実践では映像教材とタスク型外国語教育のアプローチを採用し、その中で学習ストラテジーを補助的に指導するというプランを考案し、以下の三つの研究課題を設けた。

課題1：映像教材とタスクを取り入れることが、学習者の学習動機の維持に役にたつかを明らかにする

課題2：新たにデザインしたカリキュラムが、学習者の日本語による日本語運用能力の促進に役に立つかを考察する

課題3：本実践が、自律的学習能力の向上を促すかどうかを観察する

データ収集に関しては、まず、課題1について、授業満足度調査票と学習シートを通じて学習者がどのように授業を受け止めているのかを把握する。研究課題2については、会話テストを行い、学習者の学習成果を分析する。研究課題3に関しては、学習ストラテジーの使用の自己評価に関するアンケートを行い、成果を考察する。



3. カリキュラムデザイン

(1) 映像教材の作成

本実践の学習目標を検討する際、授業に参加した学習者を囲む学習環境にどのような日本語による言語活動が起こりうるかをまず検討した。そこで浮き彫りになったテーマとして、近年日本からの観光客の増加により、台湾の中で日本人に自国の文化を紹介する機会が多いということがわかった。ところが、筆者が所属している学校で提供されている日本語の授業は日本語の 4 技能の養成を目標としたものが多く、実際に日本語を使用して、日本の文化や台湾の文化を説明する授業が欠如していることに気づいた。そのため、本実践においては、テーマを「台湾に観光に来ている日本人に台湾文化を紹介する」と設定した。

授業で提示する教材は主に映像教材であるが、問題は映像内容をいかに入手するかである。近年、ビデオカメラやスマートフォンなどのデジタルデバイスの普及とともに、誰でも映像素材を容易に自作できる時代になってきた。本実践では、受講生に自分が囲まれているコミュニティの中での日本語の運用を意識させるため、ある台湾人が日本人観光客を台湾新幹線駅から受講生の故郷、キャンパス、学校の近くにある観光地などを案内するというテーマのもとに、一連の映像教材を作成した。14 週間の学習期間に、「初めまして」、「私の好み大公開」、「人気スポット」、「グルメ料理ショー」、「逢甲夜市へ行こう」という 5 つの学習内容を考案した（詳しい内容はクラス専用ホームページ <http://dokodemolinlin.jimdo.com> に収録）。

次に、タスクベース型外国語教育の流れを参考にし、各課の中に「ウォーミングアップ」、「単語」、「文型」、「学習ストラテジー」、「映像本文」、「ディスカッション」、「タスク」、「振り返り」といった学習活動をデザインした。

(2) タスクベース型外国語教育の応用

本実践の受講生の多くは日常生活に日本語を運用する機会が少ないため、授業を行う際、現実の生活で起こりうるタスクを導入することによって、受講生の学習動機の維持と日本語による運用能力の向上を目指した。授業を行う際に、具体的な進め方として、タスク型外国語教育 (TBLT) のアプローチを採用した。授業の進め方は Willis (1996) を参考にし、各学習テーマ（「初めまして」、「私の好み大公開」、「人気スポット」、「グルメ料理ショー」、「逢甲夜市へ行こう」）の 5 つの学習テーマにおいて、次の三つの段階で授業を進めた。



① プレタスク (the Pre-Task Stage) : 「ウォーミングアップ」、「単語」、「文型」、「学習ストラテジー」

この段階はタスクを遂行するための準備として位置づけられる。まず、ウォーミングアップにおいて、学習トピックを明示する。次に、そのトピックに関連する単語や文型、学習ストラテジーを取り上げる。さらに、タスクの目標をわかりやすく伝える。

② タスク (the Task Cycle Stage) : 「映像本文」、「ディスカッション」、「タスク」
ここで、指導者が映像教材を導入し、学習者に質問をする。各課の映像教材は「問題」と「本文」という二種類に分けられて、各映像は2分以内に設定している。

さらに、学習方法について意識化するためのアクティビティとして、学習者にペア²を組んでもらい、タスクを遂行する方法についてディスカッションしてもらおう。指導者はその間クラスを巡回し、必要とされる支援を提供していく。各ペアがタスクを完成し、代表を選んで、発表する。

③ ポストタスク (the Language Focus Stage) : 「振り返り」

指導者が学習者に完成させたタスクの作品から生まれてきた言語上の問題を取り上げ、改善した例文を説明する。その後必要に応じて練習を行う。

(3) 学習ストラテジーの導入とカリキュラムデザイン

本実践はインターネットを利用して日本語を学ぶ授業であるため、学習ストラテジーの指導は主に、インターネットリソースを生かせるものを念頭に入れた。また、学期初期に行ったレディネス調査で、受講生に「日本語学習に関する悩み」について聞いた結果、彼らの学習に関する悩みに「日本語能力試験を準備する方法がわからない」と「単語が覚えられない」、「文法知識が足りなくて、自分でうまく文章を作れない」が挙げられていた。しかし、日本語能力試験の準備は本実践の趣旨ではないため、試験準備を目的とした学習ストラテジーは提示せず、そのかわりに、「単語を覚える」ことと「文章を作る」ために役に立つ学習ストラテジーを授業で取り上げることにした。具体的に取り上げた学習ストラテジーは「パソコンで知らない単語を調べる」、「インターネット

² ペアを組んでもらう方法は主に学習者に自分でパートナーを探してもらうようにしている。パートナー探しが困難な学習者もいたため、その際、指導者が協力した。



で日本語の発音を調べる」、「学んだ単語で文を作る」と「他者と協力して会話文を作る」であった。また各テーマが終了する際、振り返りとして、学んだことへの自己評価というメタ認知ストラテジーについて指導した。以下、本実践のカリキュラムデザインを示す。

表 1 映像を取り入れたタスク型授業デザイン

テーマ	プレタスク	タスク	ポストタスク
1 はじめまして	<ul style="list-style-type: none"> グループで台湾にある日本文化について話し合う。 教師の初めて日本人と駅で待ち合わせる映像を見て、質問に答える。 自己紹介に関する単語や表現を学ぶ。 ネットで日本語の単語の意味、発音、文を作る方法、他者との協力について学ぶ 	<ul style="list-style-type: none"> 日本人が台湾に来ている状況を想定し、自分のことをもっと知ってもらうための会話内容を作成し、発表する 	<ul style="list-style-type: none"> 発表に出てきた表現を修正する 自己評価表で学びを振り返る
2 私の好み大公開	<ul style="list-style-type: none"> ゲームで日本語を言い換える練習をする 教師が日本人友人に台湾のお土産を紹介する映像を見て、内容を予測する ものを紹介する単語や表現を学ぶ ネットで日本語の単語の意味、発音、文を作る方法、他者との協力について復習する 	<ul style="list-style-type: none"> 日本人に興味を持ってもらうために、自国文化を表現できる商品やものを紹介する 会話内容を作成し、発表する 	<ul style="list-style-type: none"> 発表に出てきた表現を修正する 自己評価表で学びを振り返る
3 人気スポット	<ul style="list-style-type: none"> 写真を使って、人気スポットを当てるゲームをする 台中の人気スポットを紹介する映像を見て、質問に答える 観光スポットの紹介に関連する単語や表現を学ぶ ネットで日本語の単語の意味、発音、文を作る方法、他者との協力について復習する 	<ul style="list-style-type: none"> 自分の故郷や住んでいるコミュニティにあるオススメの場所を外国人に紹介する 会話文や案内ガイドを作成する 	<ul style="list-style-type: none"> 作品に出てきた表現を修正する 自己評価表で学びを振り返る



<p>4 グルメ料理ショー</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・学生の自作映像で料理の名前を当てる ・教師が自分の故郷のグルメの紹介映像を見て、質問に答える ・料理の作り方の紹介に関連する単語や表現を学ぶ ・ネットで日本語の単語の意味、発音、文を作る方法、他者との協力について復習する 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の故郷の特色料理や好きな食べ物の作り方を日本語で紹介するレシピを作成する 	<ul style="list-style-type: none"> ・作品に出てきた表現を修正する ・自己評価表で学びを振り返る
<p>5 逢甲夜市へ行く！</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・日本の祭りに関するクイズゲームをする ・台湾の中元節と夜市の紹介に関する映像を見て、教師の質問に答える ・祭りや夜市に関連する単語や表現を学ぶ ・ネットで日本語の単語の意味、発音、文を作る方法、他者との協力について復習する ・メタ認知ストラテジーを認識する 	<ul style="list-style-type: none"> ・台湾のお祭り、逢甲夜市をパワーポイントや映像で説明する 	<ul style="list-style-type: none"> ・作品に出てきた表現を修正する ・自己評価表で学びを振り返る

IV. 実践の結果と考察

1. 授業への評価

ここでは、課題1の「映像教材とタスクを取り入れることが、学習者の学習動機の維持に役に立つか」について検討する。使用した調査方法は満足度調査票と自由回答形式の学習シートである。

授業満足度調査の質問項目は表2のように11問からなっている。各質問において、「とてもそう思う」「そう思う」「ややそう思う」「あまりそう思わない」「そう思わない」「まったくそう思わない」という6段階の選択肢を与え、学期末に学習者に選択してもらった。各段階の点数を6点から1点に計算し、平均得点を集計した。満足度調査の結果は次の通りである。



表 2 インターネット日本語授業満足度調査

問題	平均
1.今学期の授業において、教師の自作映像を教材にしているところが自分の学習動機の促進に役に立った	5.47
2.今学期の授業に出てきたタスクは自分の日本語学習の意欲を促した	4.75
3.今学期の授業で、ほかの学生と共同学習するチャンスが多く、学習するのは孤独ではないと感じた	5.00
4.今学期の授業内容に台湾と日本の文化に関するテーマが入っており、自分の学習動機の促進に役に立った	4.75
5.今学期の授業内容の難易度はちょうどいい	4.53
6.今学期の授業に提供されている教材、映像教材、ホームページ、プリント、学習ストラテジーが自分の学習に役に立った	5.11
7.今学期の中間テストと期末テストの評価の仕方は自分の日本語学習に役に立った	4.53
8.毎回の授業活動に私は積極的に参加した	4.62
9.授業の中、いろいろな現実生活で起こりうるタスクが取り入れられ、自分の学習に役に立った	4.82
10.この授業を通じて、私の日本語能力が向上した	4.75
11.今学期の授業内容に台湾と日本文化の比較に関するテーマが入っており、私の異文化コミュニケーション能力の育成に役に立った	4.78

調査結果を観察すると、項目 1「映像教材の使用」と項目 3「ほかの学習者との共同学習」と項目 6「提供されている学習リソース」が平均 5 以上の点数となっており、もっとも平均点が高いことがわかった。

そのことに関して、学習シートで学習者の自由回答の意見を観察すると、おなじような傾向が見えており、「映像教材の使用」と「多様な学習リソースと学習ストラテジーへの認識」と「ほかの学習者との共同学習」というところが学習者に評価されていることが伺えた。

ここでは「映像教材の使用」に対しての一部の学習者の意見を示す。

上課會看很多老師拍的影片來學習，感覺很有趣（授業中、先生が撮った映像で日本語を学ぶことはとても面白かったです）（学習シート S22）

看老師和日本人對話的影片，對話非常生動有趣（先生と日本人と会話している映像はとてもリアルで面白い）（学習シート S23）



従来の「伝統的な」授業の形では、状況・場面や会話の表現などについて主に教師がことばで説明する機会が多いが、それらには具体性が欠けているというデメリットがある。一方、黄招憲（2006）で指摘されたように映像教材を利用するメリットとは「視覚的で分かりやすい」、「学生の興味関心を強く引き出す」、「個別学習しやすい」などの特徴があげられる。今回の実践では教師が自作した映像を取り上げることによって、単語や文型を提示する際、ことばが行われた状況をまるごと示すことが可能になった。また、学習者に疑似体験を提供し、学習者が授業への注意を喚起することができたことが上記の意見から伺えた。

満足度調査の項目6で高い点数となっている「多様な学習リソースと学習ストラテジーへの認識」に関しては、学習シートでも多様なインターネットリソースを知ることができてよかったという意見が表明されていた。また、インターネットを利用し、教師が出した質問の答えを探すことによって、学習したことがより印象に残るという意見もあげられていた。

第一次用上電腦課的方式學日文，發現網上有許多資源可以學習（初めてパソコンで日本語を学ぶ授業を受けました。インターネットにたくさんのリソースがあることに気付いた）（学習シート11）

學到許多對話，自己主動找資料能讓印象更深刻（たくさんの会話ができているし、自分で資料を調べることによって、学習したものは印象に残りやすい）（学習シート36）

そのほかに、「他者とのインタラクションの多さ」ということも高い評価を受けていることがわかった。

一開始來上課以為就是在打字，用網路找資料幫助學習，但卻是互動方面很多（最初は、この授業では日本語入力を練習したり、インターネットで資料を調べたりする授業だと思い込んでいました。受けてみたら、インタラクションの多い授業だった）（学習シート24）

更多練習機會，因為之前上的日文課大多都是自己一個人練習（ここでたくさんの練習の機会がある。以前受けた日本語の授業は一人での練習がほとんどだった）（学習シート2）



さらに、今回の授業では学習者が学んだことを即座に実生活に運用できるように、タスク型の授業をデザインした。下記の学習者の回答を見ると、今回の授業内容が、彼らの日常生活にとって実用的であると認められていることが示されている。

這次的課程可以學到對生活很實用，很多幫助的會話和單字（今回の授業内容はとても実用的で、生活に役にたつ会話と単語を学ぶことができる）
（学習シート 37）

這堂課有趣的地方在於可以學會用日文介紹跟自己有關的事物可用自己的想法寫出句子（自分のことに関連することやものを日本語で紹介でき、自分の考えていることを日本語で書く練習もできるところはよかったです）（学習シート 41）

可以應用，而不是只有聽課（実際に応用できる、ただ授業を聞くだけではない）（学習シート 3）

老師教的都很實用（先生から教わったことはすべて実用的（学習シート 5）

2. 日本語運用能力の向上

ここでは、課題 2 の「新たにデザインしたカリキュラムが学習者の日本語による日本語運用能力の促進に役に立つか」について考察する。調査方法については、授業実施の初日に 1 回目の会話プリテストを行い、また、学期末になり、2 回目の会話ポストテストを行うことによって、2 回の会話テストの内容の変化を観察した。ところが、今回の授業は参加者が 47 名の大クラスである上に、授業時間の制限もあり、すべての参加者に一対一の会話テストを行うことが困難であった。したがって、47 名の中から 10 名をランダムに抽出し、学期の当初と終了時の 2 回、会話テストを実施した。1 回目と 2 回目の会話テストの両方とも「日本語で自分のことについて人に理解してもらえるように紹介する」というテーマで、時間の制限を設けずに自由に語ってもらった。学習者の発話を文字化し、プリテストとポストテストの変化を観察すると、2 回のテストにおいて、「単語の量」と「文の複雑度」という側面では変化があったことが観察できた。単語量の変化を観察する際、単語の定義は「一定の意味と



一定の音声結びついたもの」という基準で判断した。例えば、「趣味」、「勉強すること」のような意味を持つものを単語として認定した。また、単語が意味不明や中国語そのままの使用の場合は単語として認めていない。1つの単語が何回も使われている場合、それを1つとして「異なり単語数」を計算した。次の図は2回の会話テストに使われている異なり単語数を示したものである。

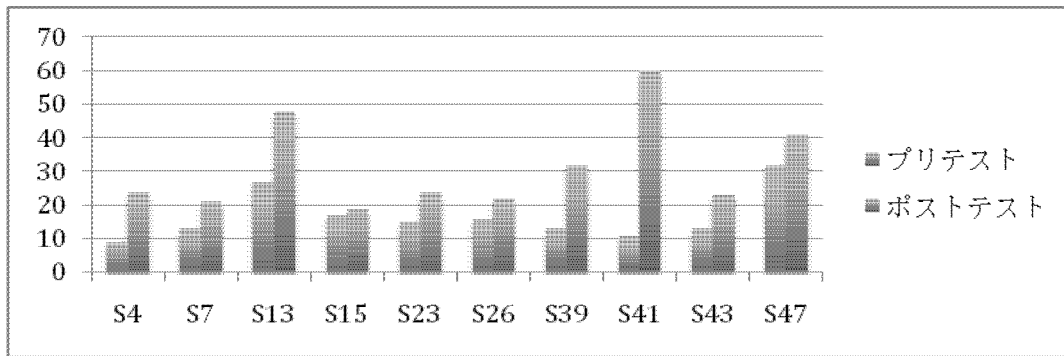


図1：会話テストにおける単語量の変化

図1を観察すると、10名の学習者が全員1回目の会話テストより、2回目の会話テストにおいて、単語量がより多くなっていることがわかった。

また、発話の文の特徴を観察すると、「文の複雑度」も変化が見られた。以下では、2名の学習者の発話例を示す。

プリテスト

私は簡です。21歳です。逢甲大学で勉強しています。南投から来ました。専門は外国語です。

ポストテスト

私は簡です。今年は21歳です。南投からきました。逢甲大学の3年生です。趣味は音楽を聞くことと映画を見ることです。私のさるほとは南投です。台湾の中に綺麗町です。日月潭と溪頭と集集があります。南投の有名な食べ物は筍で作ったクッキーです。私の専門は外国語学部です。(会話テスト S4)

プリテスト

私は侯です。台中人です。今は逢甲大学の二年生です。台中はいい場所です。台風は来ての時は台中は雨はないです。それに人は優しです。にぎやかです。私は大好きな場所は逢甲夜市です。いろいろなおいしいのものがあるで。

私の専攻はビジネスです。経済とか会計とか、正直ちょっと難しです。それに日本語と英語は習います。日本語が好きです。アニメの関係ですから。



ポストテスト

私は侯です。趣味は漫画を読むこと、小説を読むこと、そして日本語を勉強することも私の趣味。今年逢甲大學の二年生です。専攻は商学部の貿易です。私の出身は台中です。台中はいい場所です。学校へバスにきました。台中はいい場所です。バスは便利です。人も優しいです。それに、食べ物もおいしいです。安くて。あとは...デパートも多いし、週末の時はこれ全部で遊べたら使えますととても嬉しいです。私は専攻は商学部のかくき貿易ですの会計学政治学とか、難しです。でも...まあ...勉強します。(会話テスト S13)

上記の例で示されているように、1 回目の会話内容では、短い単文を羅列する現象が見られた。ところが、2 回目の会話内容では、「漫画を読むこと」のような連体修飾、「全部で遊べたら」のような条件文、「安くて」という中止形、「それに」、「でも」という接続詞などが使われるようになり、より複雑で長い文を作るようになった様子が観察された。

今回の授業では各学習テーマにそって、教師の自作映像を提示し、学習者の実生活に関連する単語や表現を取り上げた。また、教室活動において、他者との協力を通じ、自分なりの会話文を作成するための練習の機会を数多く設けた。さらに、実生活に起こりうるタスクを実行する機会も与えた。つまり、教師から一方通行のインプットのみでの学習ではなく、そこからアウトプット、インタラクションを行う学習活動も数多く行われた。その結果、学習者が与えられたインプットから自らアウトプットするようになり、2 回目の発話において、より豊かな語彙と複雑な文へと使用の変化が見られたと考えられる。

3. 自律的学習能力の向上

ここでは、研究課題 3「自律的学習能力の向上を促すかどうか」を分析する。今回の実践では、学期はじめに行ったレディネス調査を通して、受講生の「日本語学習に関する悩み」をまず明らかにしたが、そこで学習者の学習問題として挙げられた「単語の不足」と「文章の作成」に役に立つ学習ストラテジーを授業で取り上げることにした。具体的には「パソコンで知らない単語を調べる」、「インターネットで日本語の発音を調べる」、「学んだ単語で文を作る」という認知ストラテジーに加え、「他者と協力して会話文を作る」という社会的ストラテジー、「学習シートで自分の学びを振り返る」というメタ認知ストラテジーの使用であった。調査方法はアンケートを使い、次の表 3 で示した 7 つの質問を設けた。各質問において、「とてもそう思う」「そう思う」「ややそう思う」



「あまりそう思わない」「そう思わない」「まったくそう思わない」という6段階の選択肢を与え、学習者に選んでもらった。また各段階の点数を6から1のスケールに変換し、それらの平均得点を集計した結果が表3である。

表3 学習ストラテジーの調整に関する自己評価

問題	平均
1.学期初期と比べて、今はよりインターネットを使って日本語を学べるようになった	4.73
2.学期初期と比べて、今はインターネットを利用して、知らない単語を調べられるようになった	4.75
3.学期初期と比べて、今はインターネットを利用して、漢字の読み方を調べられるようになった	4.67
4.学期初期と比べて、今はインターネットを利用して、発音を調べられるようになった	4.84
5.学期初期と比べて、今はインターネットを利用して、漢字の読み方を調べられるようになった	4.78
6.学期初期と比べて、クラスメートと一緒に共同学習するようになった	4.84
7.毎週の学習シートによる振り返りを通じて、学期初期と比べて、自分の学びをより振り返るようになった	4.51

表3の結果を観察すると、各質問に対する平均点はすべて4以上となっており、評価が「ややそう思う」から「そう思う」になっていることが伺えた。今回の実践に参加した学習者の大半が一年間の基礎日本語を終えた段階にあり、はじめてインターネットリソースを利用して日本語を学んでいるため、インターネットリソースを十分に生かして、上手にタスクを完成できたかどうかについては「やや自信がない」という結果となっている。

次に、各質問に対する学習者の自己評価の内訳(表4)をみると、半分以上の学習者が「とてもそう思う」、「そう思う」という選択を選んだ項目は「2知らない単語を調べられるようになった」、「4発音を調べられるようになった」、「5漢字の読み方を調べられるようになった」、「6クラスメートと一緒に共同学習するようになった」であった。この結果から、今回の実践に取り上げた学習ストラテジーが学習者の悩みのひとつ「単語不足」の問題にある程度解決することができたといえる。

一方、「文章の作成」という悩みについては、今回の調査ではどれぐらい学習者の問題解決できているのか、現段階ではまだ明確な傾向が見られない。

以上のように、具体的に学習者が教師から課せられたタスクを行う際、どのように授業で取り上げた学習ストラテジーを駆使して、問題解決しているのかについては、今後個々の学習者への質的な調査が必要になってくると考えられ



る。

表 4 学習ストラテジーの調整に関する自己評価の内訳

問題	とても そう思う	そう思う	やや そう思う	あまり そう思わ ない	そう 思わない	まったく そう思わ ない
1.学期初期と比べて、今はよりインターネット を使って日本語を学べるようになった	25%	25%	36%	14%	0%	0%
2.学期初期と比べて、今はインターネットを 利用して、知らない単語を 調べられるようになった	25%	31%	39%	6%	0%	0%
3.学期初期と比べて、今はインターネットを 利用して、漢字の読み方を 調べられるようになった	19%	31%	44%	6%	0%	0%
4.学期初期と比べて、今はインターネットを 利用して、発音を調べられるようになった	25%	33%	39%	3%	0%	0%
5.学期初期と比べて、今はインターネットを 利用して、漢字の読み方を 調べられるようになった	25%	28%	44%	3%	0%	0%
6.学期初期と比べて、クラスメートと一緒に 共同学習するようになった	27%	33%	33%	6%	0%	0%
7.毎週の学習シートによる振り返りを 通じて、学期初期と比べて、自分の学びを より振り返るようになった	5%	39%	50%	6%	0%	0%

V. おわりに

本稿は、日本語を第二外国語として学ぶ大学生を対象に、学習者のレディネスをふまえた上で、映像教材とタスクベース型外国語教育および学習ストラテジーを取り入れた教授プランを考案し、以下の三つの研究課題を設けた。

課題 1 : 映像教材とタスクを取り入れることが、学習者の学習動機の維持に役に立つかを検討する

課題 2 : 新たにデザインしたカリキュラムが、学習者の日本語による日本語運用能力の促進に役に立つかを考察する

課題 3 : 本実践が、自律的学習能力の向上を促すかどうかを観察する

まず、課題 1 では、満足度調査を通じて学習者が本実践に対する評価から学



習動機の維持に役に立っているかどうかを観察した。満足度調査の結果によると、学習者が「自作映像教材の使用」と「ほかのクラスメートと共同学習ができること」と「提供されている学習リソース」が最もよい評価を与えていることがわかった。

課題2については、学期初期と学期末に2回に分けて行った会話テストの変化を観察すると、「語彙量の増加」と「文の複雑度」において、2回目のテストが1回目より向上しているという結果が見られた。

さらに、課題3の自律的学習能力の向上に関して、今回はアンケートを利用して、学期末に学習ストラテジーの調整の有無に関する自己評価をしてもらい、その結果、導入した6つの種類の学習ストラテジーはすべて学習者により使われるようになっていることが観察できた。

一方、個々の学習者がどのような、またはどのように学習ストラテジーを使い、与えられたタスクを完成したかについては、今回の実践で明らかになっていない。今後はこの点についてさらなる調査・分析を行うことが必要である。

謝辞：本論は「105年度教育部多國語言與文化連結創新課程發展計畫（助成番号：MOE-105-2-4-026）」の補助金を受けたものである。また、授業の実施において、逢甲大學外国語センター張又華先生にご協力をいただいたことに感謝申し上げます。



参考文献

- 尹福姬 (2008) 「日本語教育における映画の可能性 — 『映像日本語演習』の例を中心に —」『人文科学研究』14 pp.22-26。
- 矢崎満夫 (2009) 「アニメを使った日本語教育活動『アニメで日本語』の開発 — 「アニメシオン」のティーチング・ストラテジーに着目して —」『国際交流センター紀要』第 3 号 pp.27-42。
- 村上千智 (2008) 「留学中の自己観察の有効性—動機付け、ストラテジーアンケートからの考察」『外国語としての日本語教育多角的視野に基づく試み』畑佐由紀子 (編) 219-230。
- 林明煌 (2005) 『ニーズに基礎をおく日本語カリキュラム開発に関する研究 — 台湾後期中等教育をめぐって』尙昂文化。
- 林盈萱 (2009) 「日本へ留学する台湾人大学院生の自律性を高める会話教育 — アクションリサーチを通じて —」『留学生教育』14 pp.23-30。
- 林盈萱 (2015) 「タスク型日本語教育のデザインと実施 — 日本語非主専攻の大学生を対象に —」『逢甲大学人文社会学報』第 30 号 pp.105-123。
- 板井美佐 (2003) 「学習ストラテジー教育の指導試案：コミュニケーション能力向上スキルの指導法」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』18 号 81-123。
- 牧野成一 (2008) 「日本語・日本文化教育とアニメー『千と千尋の神隠し』の場合」畑佐由紀子編『外国語としての日本語教育 多角的視野に基づく試み』pp.61-81。
- 金田純平 (2014) 「日本語教師によるビデオ教材の作成と共有のすすめ」『日本語音声コミュニケーション』第 2 号 pp.28-59。
- 宮副ウォン裕子・吉村弓子 (2005) 「ヴァーチャル教室の「日本の社会・文化」にかかわる意見の調整」リタ高橋李玉香他編『日本研究と日本語教育におけるグローバルネットワーク 第 2 巻 日本語教育』pp.281-292。
- 柴田智子 (2008) 「アニメを利用した日本語教育 — 学生の評価と Oral Summary の分析を中心として —」畑佐由紀子編『外国語としての日本語教育 多角的視野に基づく試み』pp.83-102。
- 溝口博幸 (1995) 「インターアクション体験を通じた日本語・日本語事情教育 — 日本人家庭訪問の場合 —」『日本語教育』87 号 114-125。
- 呉承和 (2012) 「大学における第二外国語の日本語授業への一試案 — 映像教材及びアニメの使用」『南台科技大学応用日語系 2012 国際学術研討会 大



- 学大衆化状況における日本語教育の可能性 — モチベーション管理・多人数クラス・学習効果測定』 pp.73-90。
- 関麻由美 (1996) 「中級日本語学習者に対する学習ストラテジー・トレーニングの事例研究 — 「選択的注意」と「ノート取り」のトレーニングの試み — 」『言語文化と日本語教育』 11号 48-61。
- 黄女玲 (2016) 「学習者が気付く敬語学習としての実践—日本のアニメ動画を用いて—」 In Wen-ching Ho(Eds.) *Foreign Language Education at Home and Abroad: Pedagogy in the Contexts of Language, Literature ,and Translation.* pp.361-385。
- 黄招憲 (2006) 「マルチメディアと教育 — その作成と利用」『台湾応用日語研究』 第三期 pp.135-150。
- Willis, J. (1996). *A Framework for Task-based learning*. Harlow: Person Longman.
- Zimmerman, B. J. ; Bonner, S. & Kovach. R. (1996). *Developing Self-Regulated Learners*. Washington : American Psychological Association.



Incorporating In-house Drama Materials and Learning Strategies in Task-based Japanese Courses

*Ying-Hsuan Lin** *Namba Koji***

Abstract

This study aimed to explore if the application of in-house drama materials and learning strategies to task-based Japanese courses can enhance the learning outcome of non-Japanese majors. The course in this study took 14 weeks and 47 non-Japanese majors participated in a course evaluation, pre and post conversation tests, and a survey of their adjustment to learning strategies. The study generates the following findings. First, the course evaluation reveals that the in-house drama materials, collaboration with classmates and diversified Japanese learning sources help maintain the participating students' motivation of learning Japanese. Secondly, the conversation test results demonstrate that the participating students' speaking performance in the post-test is better than that in the pre-test in terms of their improvement of vocabulary and complex sentence structures. Finally, the survey shows that the participating students applied the taught learning strategies, and thus, they began to develop the ability of self-regulated learning.

Keywords: in-house drama materials, task-based course design, learning strategies, non-Japanese majors

* Assistant Professor of Foreign Language Center, Feng Chia University.

** Associate Professor of Center for International Education and Exchange, Osaka University.

